

留学報告書 ～挑戦～

カゼノビア大学
外国語学部生（長期）

大きな目標でもあった長期留学が2019年8月19日から始まりしました。アメリカのニューヨーク州にあるカゼノビア大学へと向かいました。初の海外が留学でもあり、正直な気持ち出発の日から不安しかありませんでした。その不安が命中したのか、少しトラブルがあり、成田空港から同じ飛行機で行くはずだった友人とも別れることになってしまい、一人でアメリカへと向かいました。税関検査や、乗り換えの飛行機に乗り換え中等など出発日から大きな壁へとぶつかることとなりました。周りがネイティブしかいない状況下で、自分が今まで習ってきた英語は頭から消え去り、つたない英語でやり取りを空港の人としたのを今でも鮮明に覚えています。この時にはもう帰りたいという気持ちでいっぱいでしたが、無事に大学の最寄りの空港に到着することができ、大学の教授に迎えに来てもらいました。そこで教授教授に晩御飯をおごってもらい、初めてのアメリカで食べたものがマクドナルドで立ったことは記憶にしっかりと残っています。

到着した大学、カゼノビア大学はニューヨーク州に位置しており、私が想像していたニューヨークとはかけ離れていました。カゼノビアはニューヨークの中でもかなり小さな町で、まさに田舎といった言葉が似合う街だと思います。大学の周りには少数の飲食店や薬局などがあり、あとは大きな湖と森に囲まれている、自然豊かで、非常にきれいな町でした。カゼノビアではほとんどの生徒が寮で生活をします。私たちは授業の始まる一週間前ほどに大学の寮についていたのでまだほとんどの生徒がいない状況でした。授業開始日が近づくにつれて生徒も、徐々に増えてきていよいよ始まるのかと思うようになりました。授業が始まり最初の一か月ほどは非常につらいものでした。授業も現地の人たちと同じ授業で最初はまったく雰囲気などについていけず、友達もできないままでした。この時期が一番日本に帰りたいと思っていた時で、あまり楽しいとも思いませんでした。ある日少し離れた場所で、ニューヨーク州のフェスティバルがあるとのことだったので行くことにしました。そこであるグループから声を掛けられ、案内をしてくれることになりました。そのグループの人たちは去年の留学生と仲が良かったと聞きすぐに打ち解けることができました。これが初めてアメリカ人の友達ができた瞬間でした。その日からそのグループの数人の人たちと学校生活を送ることになりました。授業後の夕食などは、その友人たちとほぼ毎日食べるようになり、土日も課題を一緒にやり、夜はカードゲームなどをしていました。また週末の夜にはアニメや映画を友達と見るのが恒例になっていたのも、日本のアニメを教えたり、アメリカで人気の映画を教してもらったりし、楽しい日々を送ることができました。

アメリカの授業は基本的に日本よりも断然に課題が多く、土日も勉強をするということが多かったです。教科書を読んでくるのは当たり前で、とにかくその量の多さに、挫折しそうに何度もなりました。カゼノビアではESLといった留学生用の授業はないに等しく、現地の人と同じ授業をとらなければならなかったのも、専門用語などとにかく苦勞をしました。大変ではありましたが、先生たちのサポートは手厚く、授業についていけないか聞いてくれたりし、分からないところは説明を何度もしてくれました。友人のなかでレイチェルという子には一番お世話になりました。私が取っていた授業の中でEffective Speaking というものがあり一番大変な授業の一つでもありました。もちろん現地の人用の授業なので、英語力は必須で、日本で行ってきたどのスピーチの練習よりも大変でした。ですが友人のレイチェルが添削やアドバイスを非常に丁寧にしてくれて、授業の先生からも高い評価をもらえることができました。おそらく一人でやっていたら、間違いにも

気づくことができず、英語力の上達にはならなかったと思います。

やはり留学中に友人を作るということは帰ってきてから非常に大事なことだったなと負いました。アメリカではなるべく日本人と行動することは避けるようにし、アメリカ人と行動することを心掛けました。アメリカ人と行動をすることが一番の英語の上達だと思いました。わからないことは何でも教えてもらうことができ、間違いは直してもらい、常に吸収することができました。もう一つ私が心掛けてよかったと思っていることは、とにかく話すということです。間違ってもいいから相手に伝えるということは、相手も指摘してくれるし、こっちも話す練習になりました。日に日に自分の英語に自信が持てるようになっていくのを感じていくことができ、留学から数ヶ月したころには、恥ずかしさというものもなくなり、かなり自信を持てるようになりました。10月には、本場のハロウィーンも体験しました。みんなでコスプレをし、近隣の家トリックオアトリートを言いに行き、何もかもが初めてでした。そのあとはカゼノビア大学の生徒によるロッキーマジックというミュージカルもみんなで見に行きました。

休暇では、11月のサンクスギビングブレイクには、ボストンとニューヨークシティに行きました。小さいころからの夢でもあった、ニューヨークシティでメイシーズのパレードを見るという夢をかなえることもできました。ニューヨークの冬は非常に寒く、パレードを見るために、凍えながら外で何時間も待ったのはいい思い出になりました。そのころからニューヨークでは雪が降るようになりました。サンクスギビングが終わったら、すぐに冬休みがあります。冬休みは一番仲の良かった友人の家に招待され、約一か月、滞在することになりました。そこではアメリカの家庭的な料理をふるまってもらったりし、アメリカの文化を肌で感じるようになりました。クリスマス前には、農場まで、クリスマスツリーを取りに行き、本物の木にデコレーションを施し、当日に向けて準備をしていきました。クリスマス当日には、友人の家族から、これでもかという程のプレゼントをもらい、自分の家族に用意したプレゼントをあげ、人生で一番のクリスマスとなりました。冬休みの期間中はほとんど日本語も使うことはなく、英語しかない生活で、自分の気持ちがうまく伝わらない時もありましたが、どうしたらうまく伝わるかや、様々な言い回しを練習することもでき、充実したものになりました。

冬休みが明けると、春学期も始まり留学も半分となりました。この頃には大学生生活に慣れていたので、とにかくよい成績をとるために授業を頑張っていました。春学期からは、空きコマに日本語の授業があったので、ヘルプとして参加してと友人にお願いをされ参加することになりました。その友人には一番お世話になっていたもので、なにか自分もできることがあればと思い、日本語の授業に参加していた生徒たちの手助けを頑張りました。今までこのような手助けを行ってこなかったもので、教えるという難しさに直面しました。相手の気持ちになるようにして、できるだけ簡単にわかりやすく説明をすることがどれだけ難しいのか実感をし、先生という職業がいかに大変なのか知ることができました。三月の途中までは普段通りの授業でしたが、新型コロナウイルスの影響により、途中からオンライン授業に切り替わり、帰国日も早まってしまいました。友人たちとは直接お別れの言葉も言うことができず帰国となってしまい、非常に大変な時期となりました。日本に帰ってからもアメリカでの授業は続け、友人たちとも連絡は取るようにしていました。留学がこのような形で終わるとは全く思っていませんでしたし、悔いが残るような気持ちになりました。

留學生活が予想もしなかった形で終わることになりましたが、人生で一番とっていいほど貴重な体験の数々でした。この留学を通して、数えきれないほどのことを学び、自分自身を人間的にも成長させることができたと思います。価値観、文化など日本とは全く異なる場所での生活は容易なものではありませんでした。ですが、苦労した多くの壁を乗り越えることができ、自分の一つの目標であった、長期留学を達成できたことを誇りに思っています。留学を迷っている人がいるならば、私はその人に迷う必要はないと思います。留学をするデメリットはなく、英語だけでなく人間性を成長させるには一

番の手段だと思います。楽しいことばかりではありませんが、苦勞の先にはきっといいものが待っているはずです。